

もじすさび歌

北大路

岡

810
68

I313. C
J378

び歌び歌び歌
北大路 剛

著 者

北大路 剛(きたおおじ・たけし) 1921年生

現住所 〒606 京都市左京区岩倉大鷲町47-1

☎075 (791)1879

もじすさび歌—四十八文字歌と回文の歌

1986年11月7日 第1版第1刷発行

著 者 きた おお じ たけし
北 大 路 剛

発行者 矢 部 文 治

印刷所 新聞印刷株式会社

発行所 株式 創元社
会社

大阪市北区西天満1の4の2

電話・大阪06(363)2531(代)

振 替 大 阪 5-57099

東京支店・東京都新宿区山吹町77

電話・東京03(269)1051(代)

落丁・乱丁はお取替えいたします。

©1986, Printed in Japan

ISBN4-422-91012-4 C0092

序 詞

よそはちもしや
かいふんの
うたつくるすへ
あらわせと
さけえぬこゑに
まみれゐて
ほねをおりゆき
ひろめなむ

四十八文字や
回文の
歌作る術
著せと
避け得ぬ声に
塗れ居て
骨を折り行き
広めなむ

(拙作第十七)

おほむねなれぬ
かいふんや
よそはちもしの
うたつくり
きみすへひろけ
あらわせと
さえゐるこゑを
ゆめにまで

概ね馴れぬ
回文や
四十八文字の
歌作り
「君 術広げ
著せ」と
冴え居る声を
夢にまで

（拙作第十八）

目次

はじめに……………	七
-----------	---

(第一部) 四十八文字歌

一、「いろは歌」……………	一四
二、「あめつち」に挑んだ人々……………	三
三、「いろは歌」からの脱却……………	四
四、拙作「四十八文字歌」……………	五
五、「四十八文字歌」の作り方……………	三

(第二部) 回文の歌

一、回文……………	二六
二、「回文の歌」……………	二四
三、拙作「回文の歌」……………	二五
四、「回文の歌」の作り方……………	二八

(第三部) もじすさび句

一、一文字句……………	三〇
二、二文字句……………	三三
三、二様句など……………	三六
おわりに……………	四三

もじすさび歌

四十八文字歌と回文の歌

はじめに

「もじすさび歌」とは何か、と奇異に思われるかも知れませんが、古くより我が国には「尻取り言葉」、「回文」、「もじり歌」、「折り句」など、いろいろな「文字遊び」があります。それらは単に「遊び」というだけではなく、文字を組み替え、語句を操ることの楽しさを通して、言語領域を広げるという教育効果をもたらして来たことも確かです。そこで、そうした「文字操り」や「言葉遊び」の中でも、特に厳しい条件のある「四十八文字歌」と「回文の歌」を取りあげて、それらを「もじすさび歌」と名付けてまとめてみることにしました。

ところで、「回文の歌」はともかくとして、「四十八文字歌（よそはちも

じうた)」という語は、もちろん辞書にも載っていません。それは、「もじすさび歌」と同様、私の造語で、和歌が五、七、五、七、七の三十一文字で成り立っていることから、「みそひともし」と呼ばれることに倣って、七五調四句で構成する歌を、こう名付けたわけです。

その「四十八文字歌」といいますのは、仮名文字四十八字全部を、それぞれ一回ずつ重複させずに用いて作る歌です。「それは『いろは歌』ではないか」と言われると思いますが、何も「い、ろ、は、」から始めるとは限りませんし、「いろは歌」は四十七文字で、「ん」は用いられていませんので、あえて「四十八文字歌（よそはちもじうた）」とした次第です。

とは言いましても、戦後は「ゐ」や「ゑ」が除外され、仮名文字は四十六字しか使われていません。しかし、七五調を崩さないようにするには、どうしても四十八文字が必要ですし、「いろは歌」に倣って、文語調や旧仮名遣

いも許すとなりますと、「ゐ」や「ゑ」も含めたほうがよいし、明治の頃懸賞募集された「国音の歌」も、四十八文字の歌でしたから、それに従うことにしました。ところで、確かなことは言えませんが、ここ七、八十年の間には、このような歌が発表されたということを聞きません。それと言いますのも、仮名四十八文字すべてを一度ずつ用いて、七五調の歌にするという、厳しい条件に制約されるため、そう簡単には誰にでも作れないということから、余程の暇人か、物好きな人でない限り、このような歌は作らないからでしょう。また時間をかけ、努力して作ってみたところで、無理な言い回しをしたり、意味が通らなかつたりして、作品としての価値が損なわれ、その努力に報いられるものがない上に、既に立派な「いろは歌」という作品があるため、「とても太刀打ち出来ない」と誰もが尻込みしてしまうからだろうと思います。

また「回文の歌」は、上から読んでも下から読んでも、全く同じになる歌で、古くから「俳諧歌」や「狂歌」の分野で詠まれてきましたが、五、七、五の句ならともかく、三十一文字の「回文の歌」ともなりますと、作るのが難しく、残されている作品もさほど多くはありません。

私は技術畑の出身で、今までにも著書は手掛けましたが、次に上げるように、ほとんど電気関係のものです。

『電子計測』、『電気技術百科』、『電子技術百科』、『電子回路のための雑音対策百科』、『電気の常識』、『続・電気の常識』などで、それが全く畑違いのこの分野に首を突っ込みましたのも、定年退職後の趣味として、あまり他人のやらないことを、暇つぶしにやろうと思って手を出したに過ぎません。したがって国語学や日本語史などはズブの素人ですし、史実や文献などについても全く無知ですので、「文字遊び」の域を脱しないと思います。

高齢化社会がますます進む今日、高齢者の「知的遊戯」として、頭を使うことによって、その「老化防止」に役立つだけでなく、また若い世代の方々にも、その駆使し得る語量を豊富にするのに役立つのではないかと思ってまとめてみることにした次第です。

(第一部)

四十八文字歌

一、「いろは歌」

いろはにほへと
ちりぬるを
わかよたれそ
つねならむ
うゑのおくやま
けふこえて
あさきゆめみし
ゑひもせず

色は匂へど
散りぬるを
我が世誰ぞ
常ならむ
有為の奥山
今日越えて
浅き夢見じ
酔ひもせず